

## 口永良部島の火山活動解説資料（令和7年6月）

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

口永良部島では、4月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態となっています。火山性地震は主に古岳火口付近で発生しています。

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

口永良部島では火山活動が高まった状態となっていることから、11日21時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

口永良部島では、山体の浅いところで地震活動が活発化するなど、火山活動が高まった状態であることから、噴火が発生する可能性があります。

新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火碎流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火碎流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

#### ・ 地震や微動の発生状況（図1、図4②③、図5③、図6）

4月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化しています。古岳火口付近を震源とする火山性地震が多い状態となっており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。振幅の大きな火山性地震は発生していません。

火山性地震の月回数は438回（5月：286回）と前月に比べて増加しました。古岳火口付近の火山性地震は434回（5月：279回）、新岳火口付近の火山性地震は4回（5月：7回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和7年7月分）は令和7年8月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・噴煙など表面現象の状況（図2～3、図4①、図5①）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（5月：600m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（5月：なし）。

23日から25日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近及び古岳火口周辺において地熱域を引き続き確認しました。新岳火口から火口縁上100m程度の白色の噴煙を確認し、古岳火口からは火口縁をわずかに超える程度の白色の噴煙を確認しました。

・火山ガスの状況（図4④、図5②）

12日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、20トンと少ない状態でした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり20～80トンと少ない状態でした（5月：20～50トン）。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。

・地殻変動の状況（図7、図8）

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

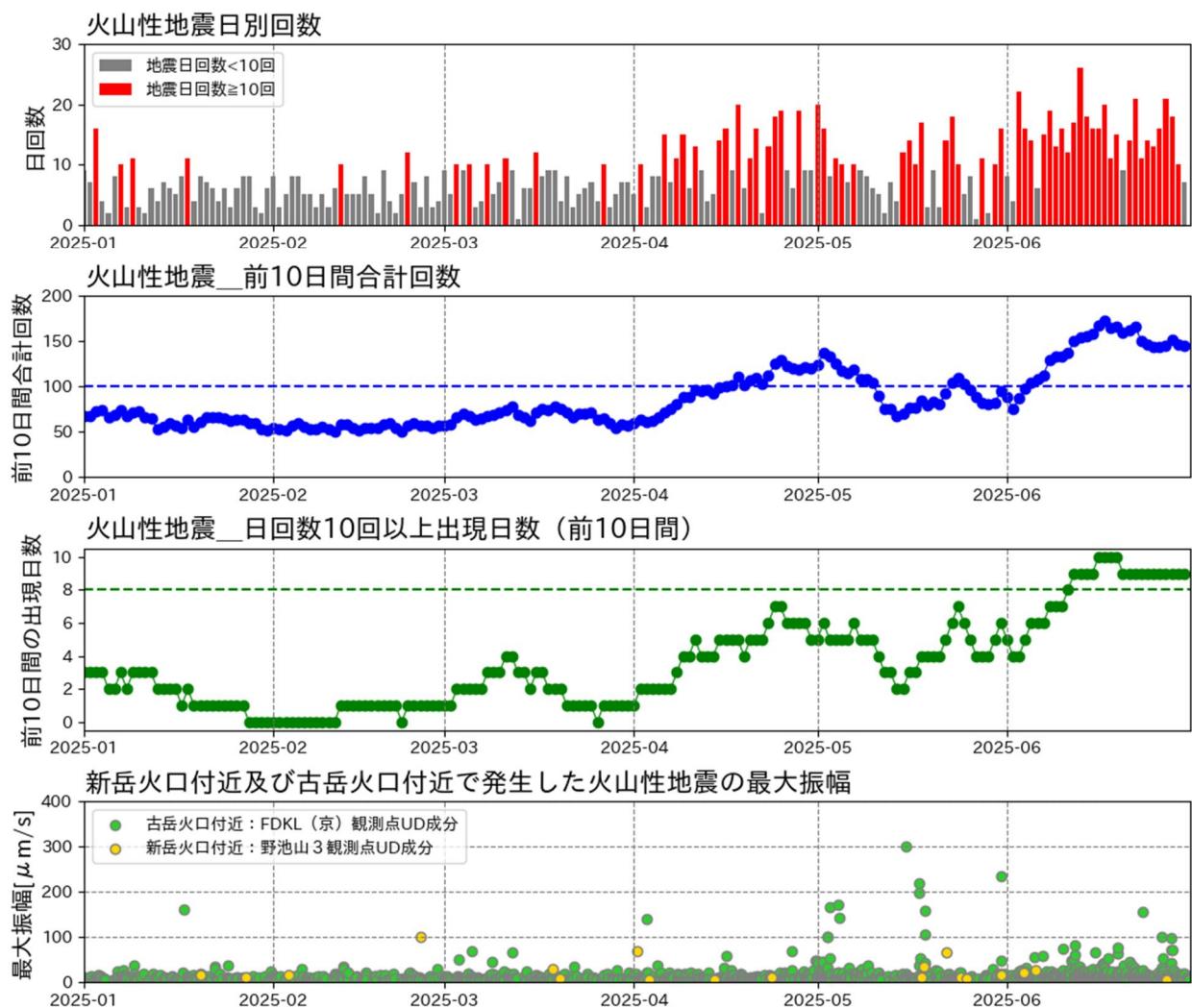


図1 口永良部島 【1段】火山性地震の日別回数、【2段】火山性地震の前10日間合計回数、【3段】火山性地震の日回数10回以上の出現日数（前10日間）、【4段】新岳火口及び古岳火口付近で発生した火山性地震の最大振幅（2025年1月1日～6月30日）

- ・口永良部島では、4月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化しています。
- ・古岳火口付近を震源とする火山性地震が多い状態となっており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。
- ・振幅の大きな火山性地震は発生していません。5月には古岳火口付近で振幅のやや大きな火山性地震が時折発生しました。



図2 口永良部島 噴煙の状況（6月20日、本村西監視カメラ）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300m（5月：600m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（5月：なし）。

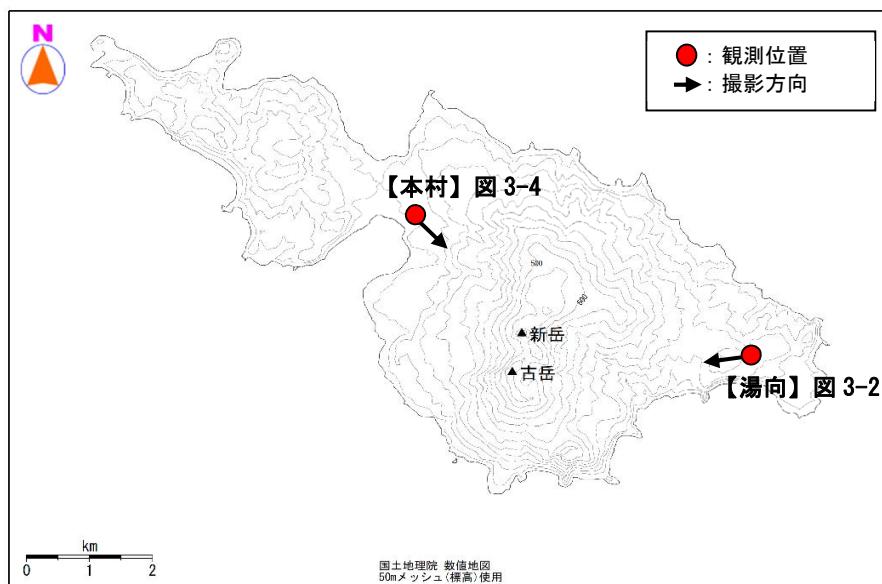


図3-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

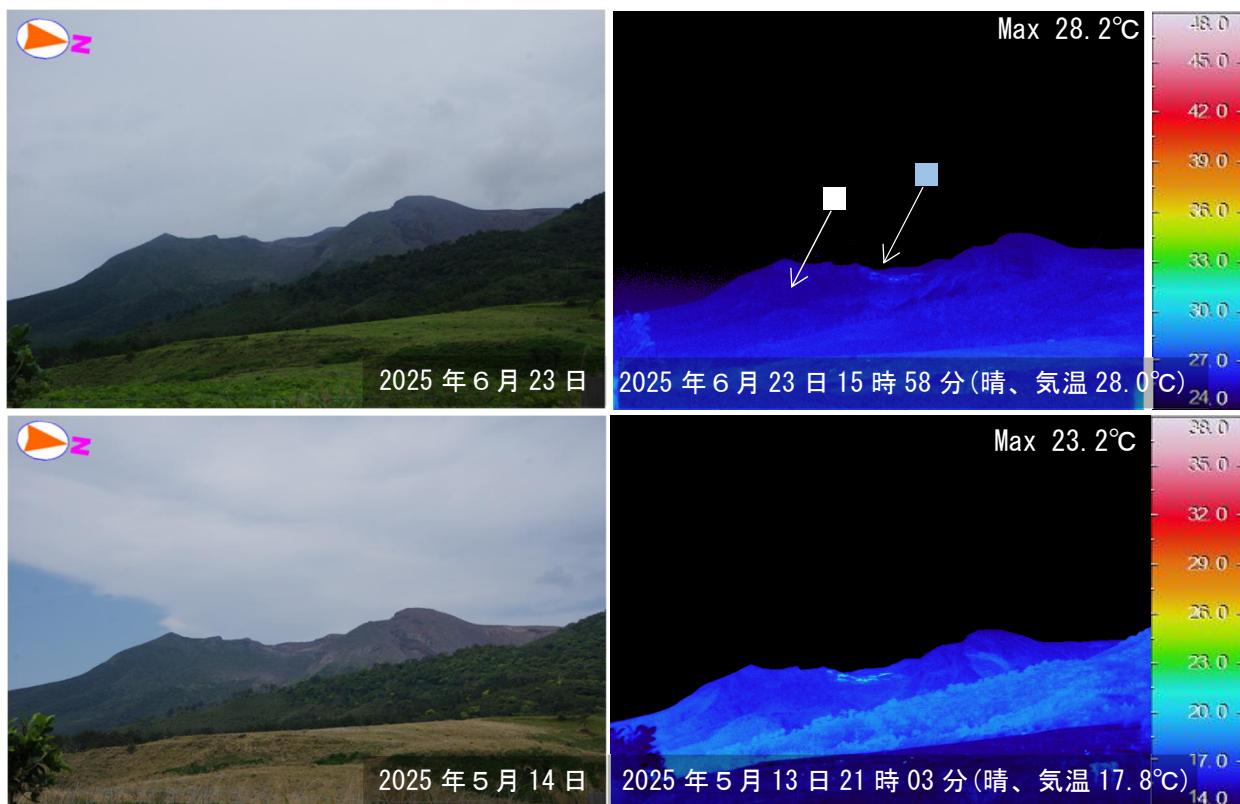


図 3-2 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

23日から25日にかけて山麓から実施した現地調査では、古岳火口周辺において地熱域を引き続き確認しました。古岳火口からは火口縁をわずかに超える程度の白色の噴煙を確認しました。

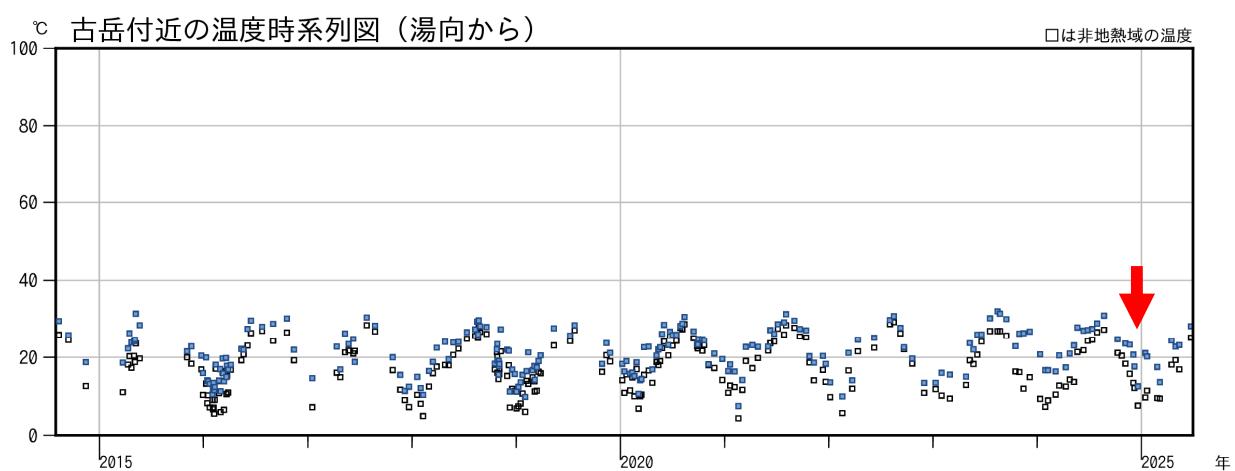


図 3-3 口永良部島 古岳火口付近の地熱域の温度時系列

(2014年9月～2025年6月、湯向から観測)

赤外熱映像装置による観測では、古岳火口付近で引き続き地熱域を確認しましたが、特段の変化はみられませんでした。古岳火口付近の地熱域の最高温度は2025年1月頃にわずかな上昇（赤矢印）が認められましたが、その後温度の上昇傾向は認められません。

各データは図3-2右上で示した領域の温度に対応しています。

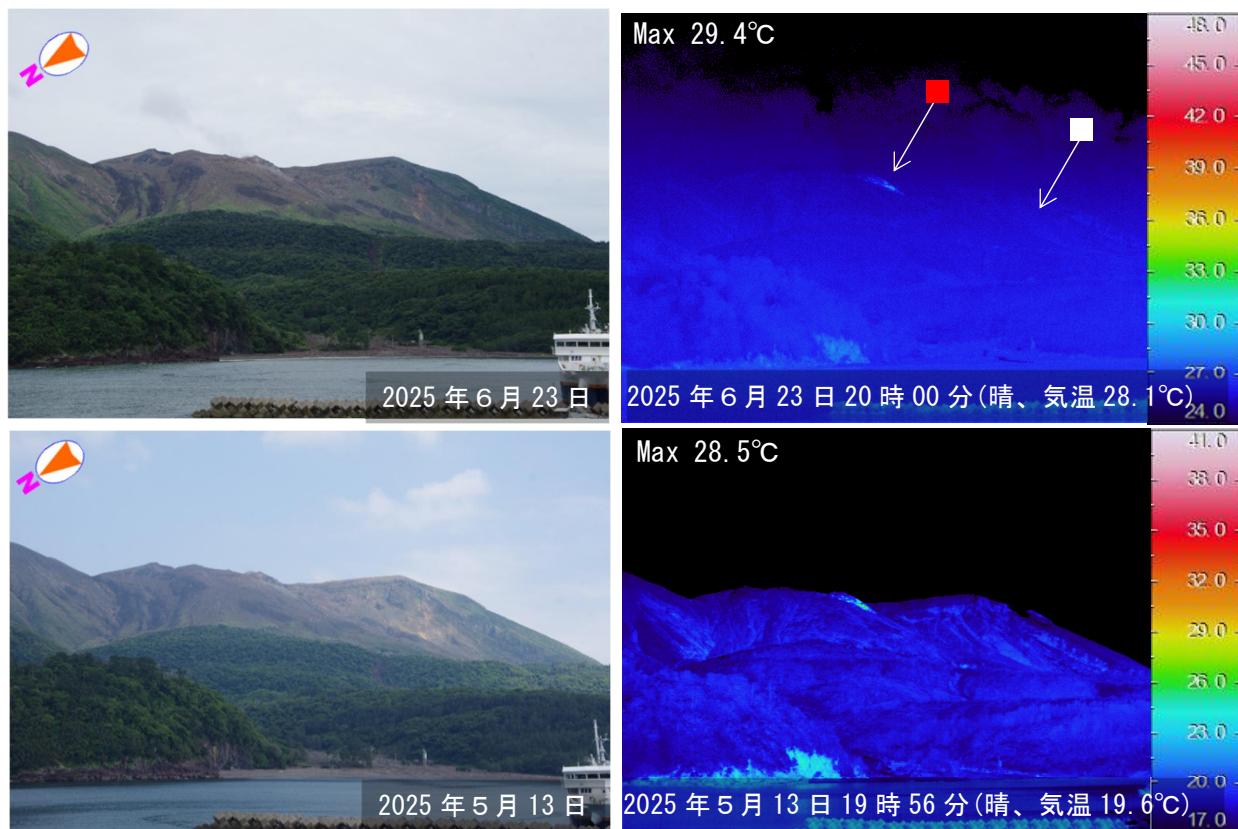
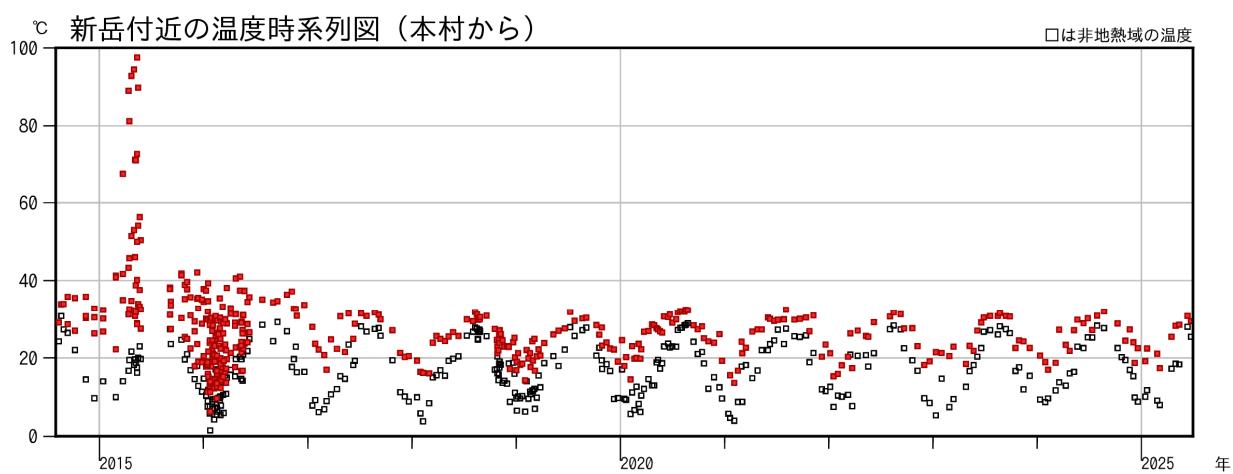


図 3-4 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

23日から25日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近において地熱域を引き続き確認しました。新岳火口から火口縁上100m程度の白色の噴煙を確認しました。

図 3-5 口永良部島 新岳火口西側割れ目付近の地熱域の温度時系列  
(2014年9月～2025年6月、本村から観測)

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近の地熱域の温度に特段の変化はありませんでした。

各データは図3-4右上で示した領域の温度に対応しています。

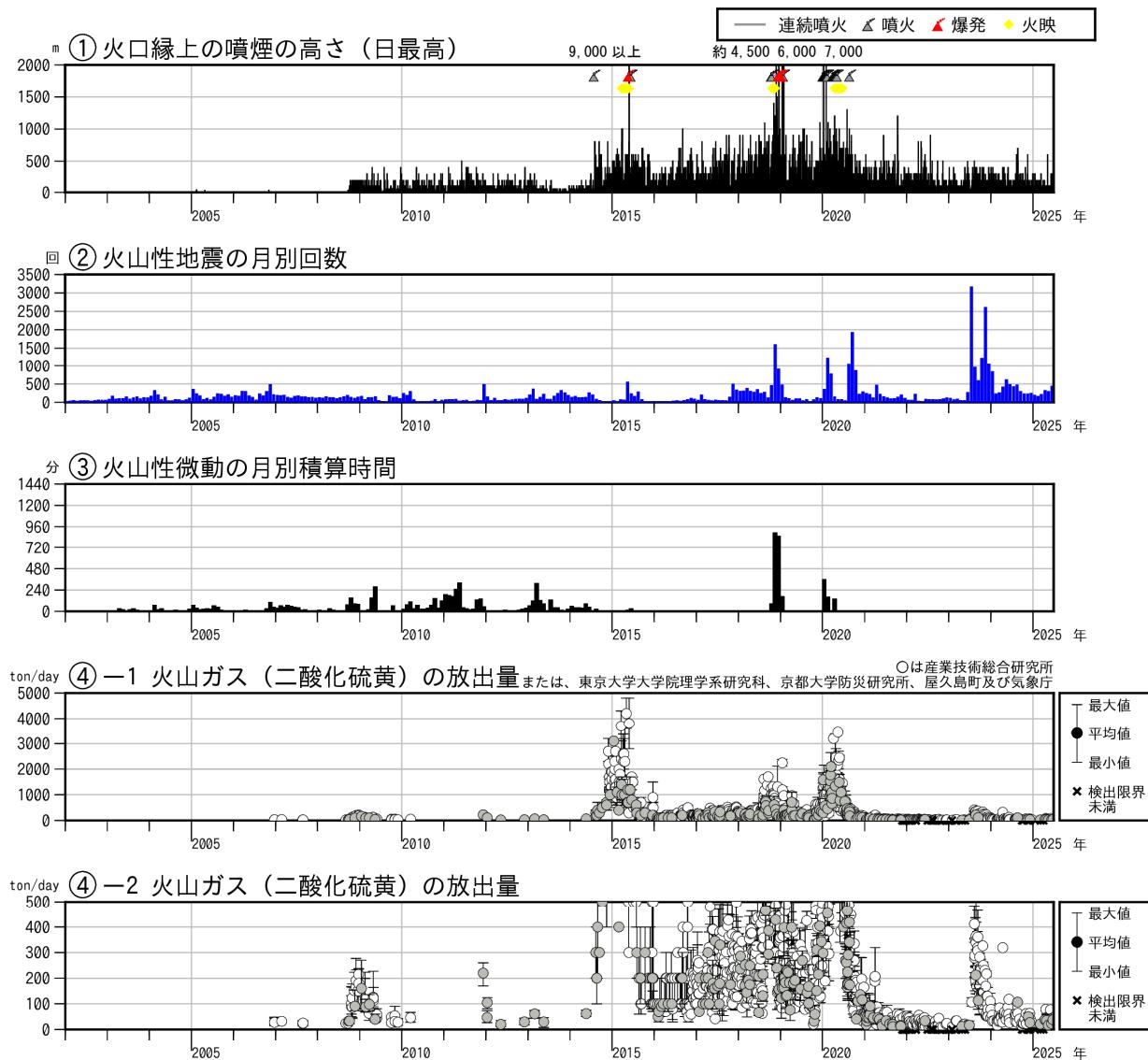


図4 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2025年6月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動  $8.0 \mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（京）（上動  $6.0 \mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動  $3.0 \mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動  $1.0 \mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動  $3.0 \mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動  $4.0 \mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

2017年12月13日から2019年1月16日までは古岳北上下動成分の計数基準を  $6.0 \mu\text{m/s}$  としています。

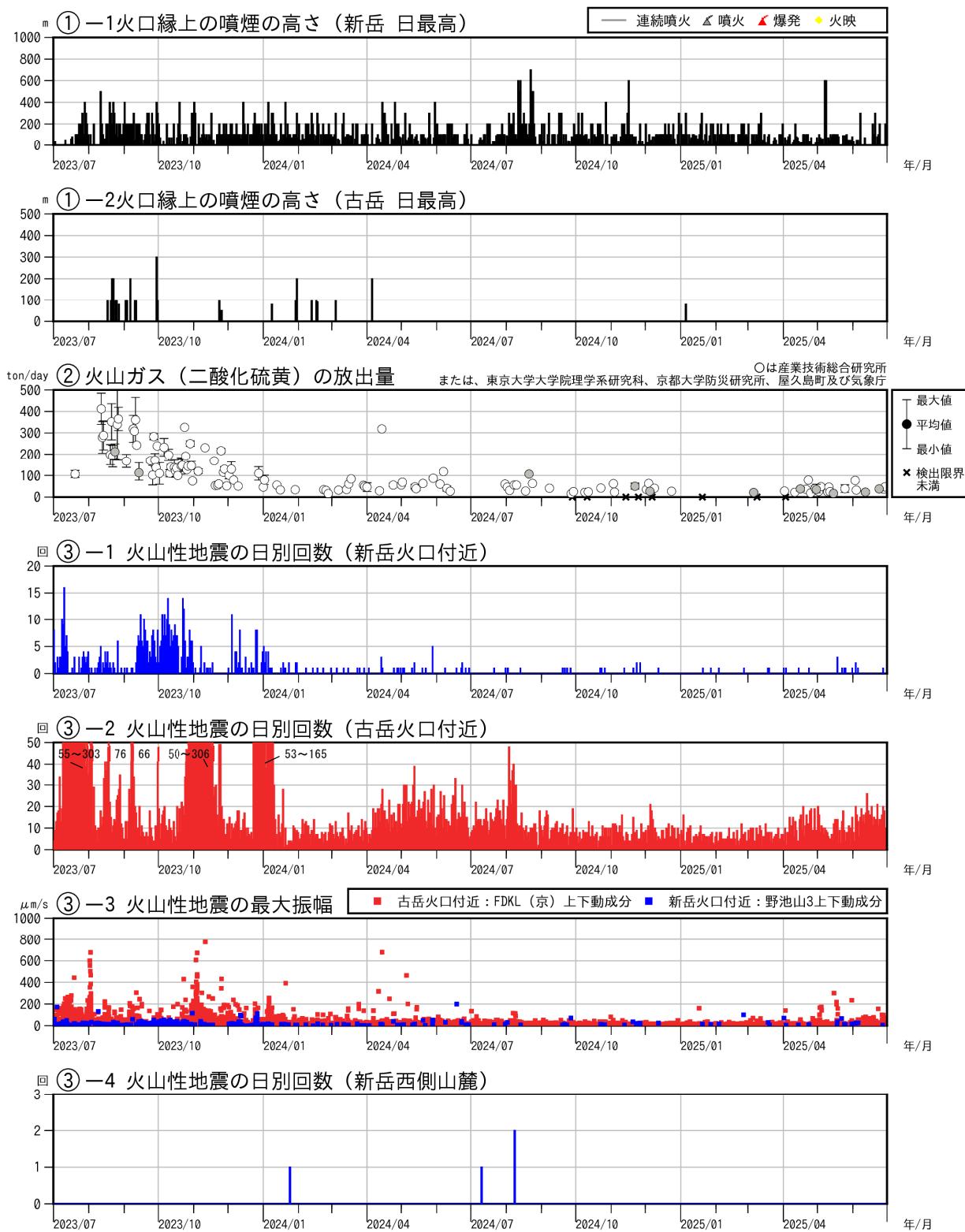


図5 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年7月～2025年6月）

<6月の状況：11日に噴火警戒レベル2から3に引き上げました>

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上300m（5月：600m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（5月：なし）。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり20～80トンと少ない状態でした（5月：20～50トン）。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。
- ・火山性地震の月回数は438回（5月：286回）と前月に比べて増加しました。古岳火口付近の火山性地震は434回（5月：279回）、新岳火口付近の火山性地震は4回（5月：7回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

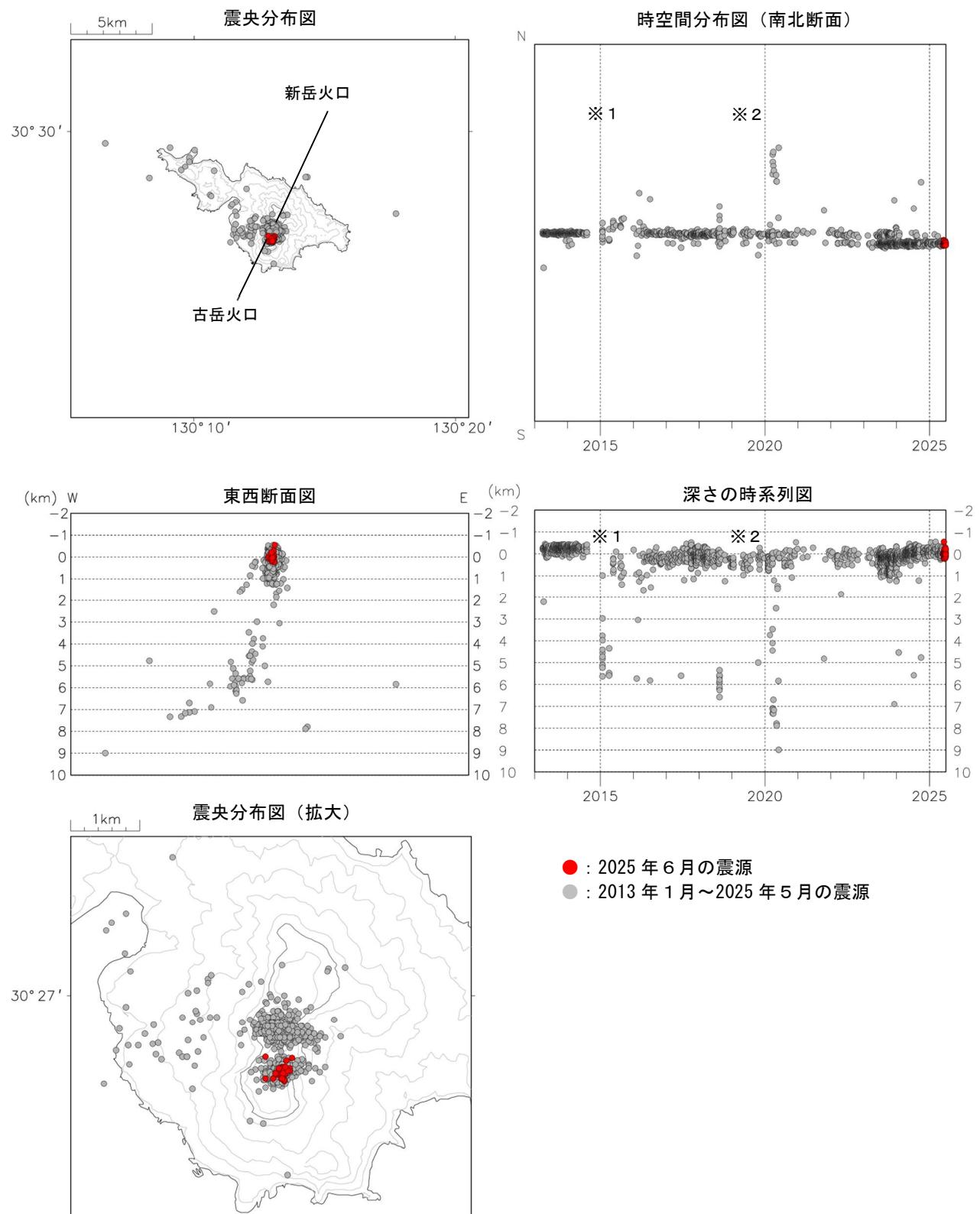


図6 口永良部島 震源分布図 (2013年1月～2025年6月)

#### <6月の状況>

震源が求まった火山性地震は、古岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日までは検知力や震源の精度が低下しています。
  - ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日までは検知力や震源の精度が低下しています。
- その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

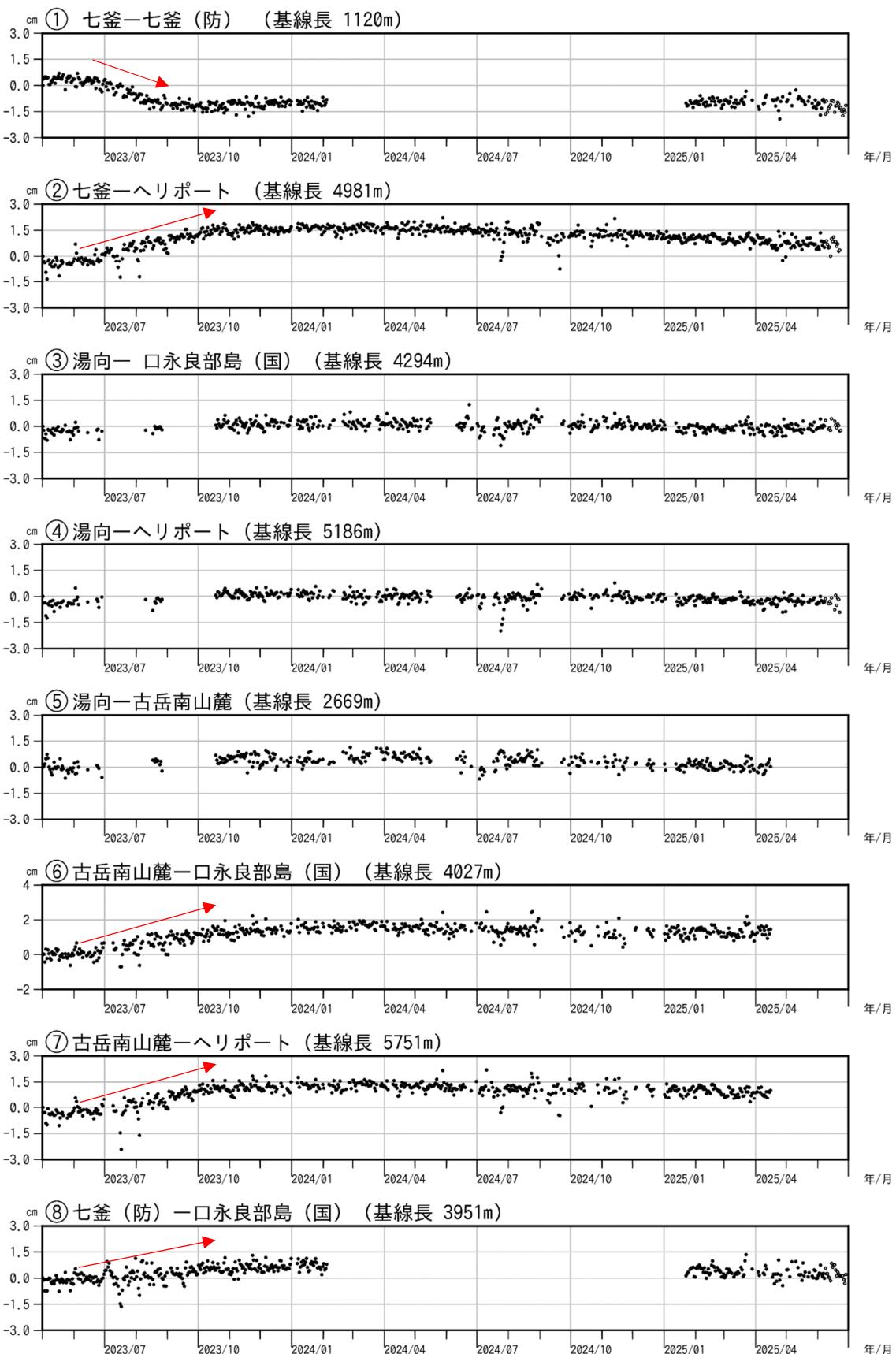


図 7-1 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2023年5月～2025年6月）

GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており（赤矢印）、現在も膨張した状態が維持されています。

これらの基線は図8の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

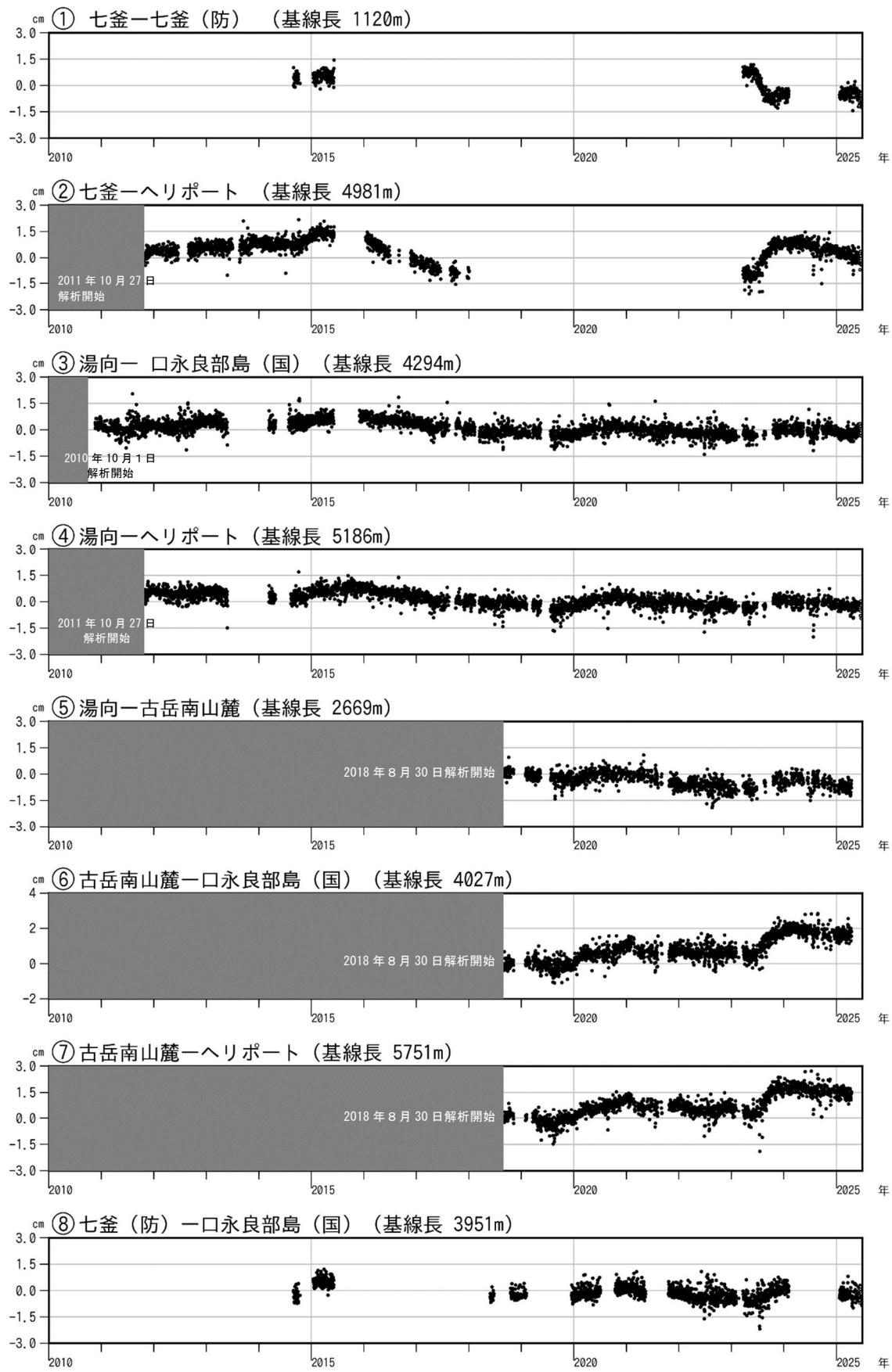


図 7-2 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年1月～2025年6月）

これらの基線は図8の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

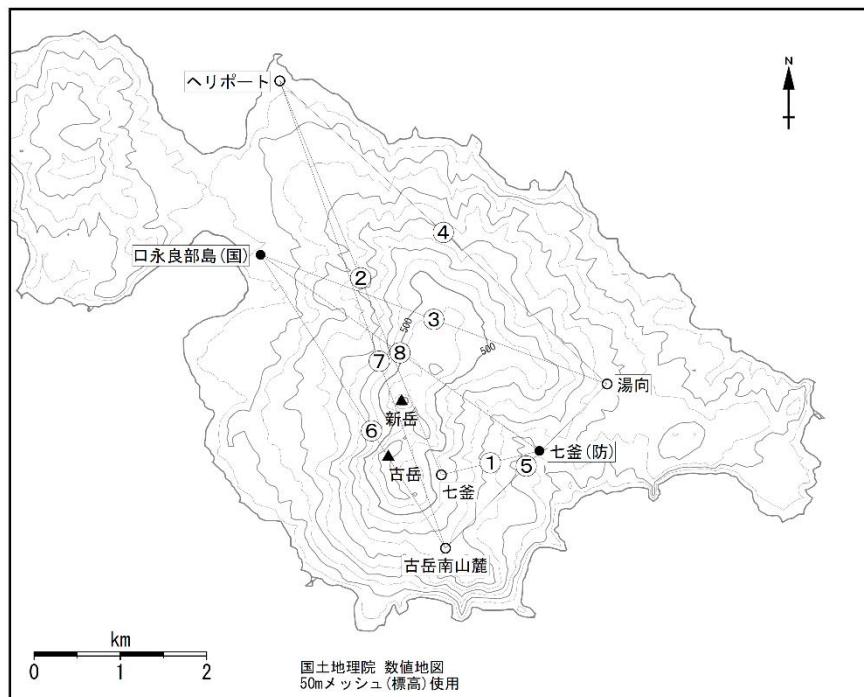


図8 口永良部島 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

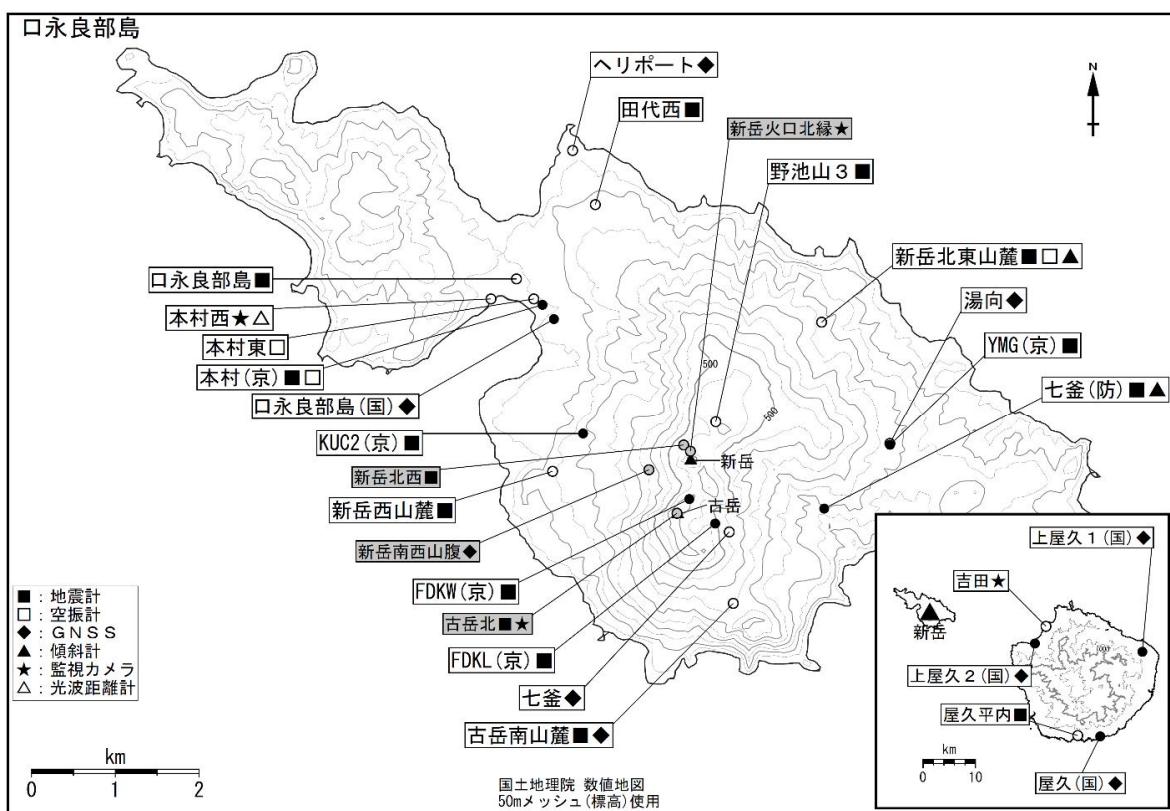


図9 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。